

天野川改修(昭和40年)以前の岩脇について

岩脇の水害メカニズム

水害への対策



岩脇とその周辺集落について

○岩脇の集落は、天野川扇状地の微高地上で、かつ立岩井から天野川の取水がしやすい位置にある。  
○岩脇では、田畑の灌漑用水を複数の井堰から取水していた。このうち立岩井で取水された用水は、集落内に張り巡らされた水路網にも流れており、岩脇では、1744年頃からこの水を活かした真綿産業が盛んであった。  
(『岩脇真綿組合規約帳』より)  
○その一方で、岩脇の集落は、地形的に水害に遭いやすい場所に立地している。

岩脇の主な水害

○岩脇は過去に度々、水害による被害を受けてきた。  
○明治時代では、明治10年、17年、29年などに水害被害の記録が確認される。(滋賀県公文書『水害表』より)  
○特に明治29年には、岩脇付近の天野川左岸堤防が決壊し、氾濫水が国鉄北陸線と東海道線の間の田畑を浸した。その後、北陸線線路が決壊し、入江村大字中多良下多良方面へ流れていった。  
(滋賀県公文書『水害表』より)  
○昭和時代には、昭和28年に台風13号が、昭和34年9月に伊勢湾台風が襲来した。(マップ②参照)

岩脇の水害メカニズム①

地下水位上昇による湧水

○岩脇は天野川の扇状地上に位置しており、地質は砂礫質である。  
○昭和40年の改修工事以前、天野川の河床は高く、地下水位も現在より高かった。そのため、大雨で天野川の水位が上昇すると、当時未舗装であった道路や家の土間、堤防や石垣など、至る所から水が湧いていた。  
○一方、砂礫質で水が浸透しやすいため、地下水位さえ下がれば、水はひいていく。

岩脇の水害メカニズム②

飯周辺の左岸側無堤部からの氾濫

○飯は天野川の屈曲部にあたり、兩岸にまたがるように位置している。集落は右岸側に位置しており、増水時には天野川の流水が直撃するため、集落前に高い石積堤防を築いていた。  
○一方、対岸の左岸側には堤防を築かず、天野川増水時にはあえて氾濫するようにしていた。この左岸無堤部から流入する氾濫水が、岩脇方面へと流れてくる。

岩脇の水害メカニズム② に対する治水対策

無堤部からの氾濫水が岩脇の農地に流入するのを防ぐため、岩脇と飯との境界に2つの堤防が設置されていた。

➤ 堤防 A  
○高さ約2mの石積み堤防である。堤防の南部分は園場整備時に撤去されたが、野瀬道より北側の一部は現存している。  
○この堤防の高さをめぐって飯と岩脇の間で争いが多く、奉行所に訴えた書類が何通も残っている。(『ふるさとむら』より)  
○堤防の脇には溜池がある。明治29年の水害時に氾濫水が堤防を越流した際に、地面が洗掘されてできた池ではないかと推測される。この溜池の一部は、現在も畑の脇に畳一枚分ほどの大きさで現存している。

➤ 堤防 B (岩脇と飯の境界部分)  
○岩脇と飯の境目に位置しており、高さは50cm程度である。  
○昭和55年に開始された園場整備事業によって、堤防は撤去されたが、農道としてその痕跡が残っている。

岩脇の水害メカニズム③

立岩井付近における堤防からの越水

岩脇や西円寺付近の天野川の堤防は、右岸側より左岸側の方が低かった。このため、岩脇山のすぐ下流にあたる立岩井付近では、増水時に左岸堤防から越流する危険があった。

岩脇の水害メカニズム③ に対する治水対策

主に村の役員が水防活動に従事しており、立岩井付近の道路や堤防上に土のうや畳などを積んでいた。

西円寺の農地への氾濫



○西円寺は岩脇山を挟んで上流側に位置する。  
○箕浦橋から岩脇山上流にかけての堤防は低かったため、増水時には天野川の水が越流し、西円寺の農地が浸水した。現在も越流堤となっている。(滋賀県HP 昭和34年伊勢湾台風 水害写真集より)

北国街道と北陸本線の間や、北陸本線の西側には、広い水路や溜池があった。ここはかつて天野川の旧河道であり、氾濫水はここから上多良方面に流れていた。

県道247号線付近は天野川の旧河道であるため、周辺の水田は“ドボ田”と言われ、田下駄をはいて農作業が行われていた。

東海道本線における新線の建設に伴い、盛土が建設された。

岩脇山は、中古生層チャートという非常に硬い岩盤でできており、岩盤がむき出しの山となっている。

○東海道本線の建設に伴い、岩脇山は一部が開削された。  
○これにより、西円寺の氾濫水は岩脇山の山裏から米原駅の東口方面に流れるようになった。

避難活動について

○決まった避難所があるわけではなかったが、一般的に浸水したら山近くの高い所へ逃げようという考えがあった。  
○岩脇の中で、雨風をしのぐことができる標高の高い場所は稲荷神社の拝殿であった。

鉄道盛土による水害メカニズムの変化

○明治22年に国鉄北陸本線の米原―長浜間が延伸された。この際に築かれた盛土によって氾濫水が堰き止められてしまい、岩脇の浸水リスクが高まった。  
○ここで堰き止められた氾濫水は、国鉄北陸本線を超え、標高の低い中多良・上多良の方へと流れていく。

